府立芥川高等学校
校長　神　絵里香

令和７年度　学校経営計画及び学校評価

１　めざす学校像

芥川高校がめざす学校像は『豊かな人間力とグローバルな視点で、自ら考え行動し、主体的に進路を切り拓く力を持った生徒を育てる学校』。

１　自ら考え行動し、自律的・主体的に学びに向かい進路を切り拓く力を持った生徒の育成
２　自己肯定感を高め他者を尊重する態度を養い、高い規範意識と人権意識を備えた豊かな人間力を持った生徒の育成
３　多様性や異文化を理解する態度を備え、豊かな教養とコミュニケーション能力を身につけた、グローバルな視点で考え社会に貢献できる力を持った生徒の育成

２　中期的目標

１．自ら考え行動し、自律的・主体的に学びに向かい進路を切り拓く力を持った生徒の育成

（１）　学力の向上（授業力向上）

ア：生徒が確かな学力を身につけ、好奇心を掻き立てられる授業となるように、教職員がいつでも、どこでも、だれとでも相談できる環境づくりと組織的な取組みを推進する。

イ：言語活動を充実させ、主体的かつ論理的に自己を表現する思考力、判断力を養う。ICT 等をより効果的に活用し、生徒のより主体的で深い学びを追求する。

ウ：観点別学習状況の評価（観点別評価）により指導と評価の一体化をすすめ、生徒が自ら学ぶ力を高める。

＊授業アンケートの授業満足度は、今後も満足度 85%以上の維持をめざす。(R４：85.7%　R５：86.6%　R６：88.2%)

（２）　希望進路の実現

ア：望ましい勤労観・職業観を持ち、主体的に進路を選択できる力を育むキャリア教育を推進する。

イ：「学力生活実態調査」等のデータを活用し、一人ひとりが希望進路に向けて頑張りきれるよう、きめ細かい進路指導を行う。

＊生徒向け学校教育自己診断における進路指導への満足度 90%以上を維持する。(R４：87.9%　R５：90.7%　R６：94.6%)

＊希望進路達成率は今後も 85%以上を維持する。(R４：89.3%　R５：88.4%　R６：87.0%)

２．自己肯定感を高め他者を尊重する態度を養い、高い規範意識と人権意識を備えた豊かな人間力を持った生徒の育成

（１）　体験学習の充実

ア：保育園実習等を通じて、福祉ボランティアに関する学びとキャリア意識の醸成を図る。

イ：地域や外部の諸機関と連携した体験活動の充実を図る。

＊生徒向け学校教育自己診断における地域との関わりに対する肯定率を令和９年度には 85%とする。(R４：66.6%　R５：75.0%　R６：83.4%)

（２）　学校行事、部活動の振興

ア：学校行事を通して自ら考え主体的に行動し協働する力を養う。また、地域とつながる機会とすることにより、生徒のシティズンシップを育む。

イ：部活動の入部率及び定着率を高め活性化を図るとともに、メリハリのある活動により学習との両立を図る。

＊部活動加入率（６月集計）75%を維持する。(R４：74.5%　R５：73.6%　R６：79.6%)

（３）　規範意識の醸成

ア：身につけさせたい規範意識を教員間で共有し、全体指導から学年・学級指導、個別指導につながる段階的な指導を徹底する。その指導がめざすところを生徒に説明し理解させ、主体的にルールやマナーを考え、守ることができるように導く。

イ：あらゆる機会をとらえて規範意識の向上を図り、学校を「皆が安心して生活できる場」となるようにする。家庭とも連携し、身の回りの人を尊重し、挨拶がしっかりとでき、時間を守ることができる生徒を育成する。

＊生徒向け学校教育自己診断における規範意識に関する設問の肯定率は、今後も 95%以上を維持する。(R４：92.2%　R５：94.5%　R６：96.5%)

＊教員向け学校教育自己診断における生徒の規範意識に関する設問の肯定率を、令和９年度には 70%とする。(R４：60.7%　R５：57.1%　R６：61.7%)

（４）　人権意識の向上

ア：すべての学校教育活動を通じて一人ひとりを大切にし、大切にされる人権教育を推進する。

イ：生徒と教職員がお互いに、お互いを尊重し、共に学び、学校全体として人権意識を高める取組みを実施する。

＊生徒向け学校教育自己診断における人権教育に対する肯定率 88%を維持する。(R４：84.2%　R５：91.9%　R６：91.5%)

３．多様性や異文化を理解する態度を備え、豊かな教養とコミュニケーション能力を身につけた、グローバルな視点で考え社会に貢献できる力を持った生徒の育成

（１）　使える英語力の育成

ア：大学等の外部機関との連携により、「グローバル専門コース」の取組みの継続・発展と、英語４技能の育成を図る。

イ：４技能を様々な場面、様々な形で用いて英語に触れる機会を多くもつことを通して運用能力の向上を図る。その結果として、英語の学習に対する意欲を高め学力調査での英語の得点率向上を図り、併せて実用英語技能検定等の資格取得をめざす生徒を増やす。

＊３年生４月の「学力生活実態調査」において英語の到達度Ｂゾーン以上の割合を、令和９年度には 40%以上とすることをめざす。(R４：40.0%　R５：25.7%　R６：31.0%)

（２）　国際感覚の育成

ア：交流生の派遣や受入れ、手紙、オンラインでの交流等、多様な形態での国際交流を促進する。

イ：異文化理解をテーマとする国内修学旅行の実施や留学生との交流等、国内において実施可能な形で異文化に触れる機会を創出する。

＊生徒向け学校教育自己診断における異文化理解の取組みへの満足度 85%以上を維持する。(R４：75.2%　R５：86.1%　R６：90.8%)

４．信頼される学校づくり（教員力と情報発信力の向上）

（１）　次世代を支える教員の育成とチームとしての教員力の向上

（２）　教職員の働き方改革による時間外勤務削減

（３）　開かれた学校をめざした、学校情報の積極的な発信

（４）　中学生やその保護者に対する、芥川高校の魅力発信

＊生徒向け学校教育自己診断における教員の協力体制に関する肯定率は、今後も 87%以上を維持する。(R４：87.2%　R５：88.5%　R６：91.9%)

＊保護者向け学校教育自己診断における情報発信に対する肯定率を、令和９年度には 85%とする。(R４：80.6%　R５：84.3%　R６：83.3%)

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析［令和　７　年　12　月実施分］	学校運営協議会からの意見
芥川高等学校 学校教育自己診断 多角的分岐分析報告書 **R8 年度学校経営計画策定に向けた提言** **1. 本分析の目的と背景** 学校教育自己診断データは、単なる過年度の総括ではありません。それは、生徒、	第１回学校運営協議会(令和７年６月 18 日実施) ○４月からの学校の様子について ・学校新聞による広報活動は、学校がどのように動いているか分かりやすくとても良い。

府立芥川高等学校

保護者、教職員というステークホルダーが組織に対して抱く「期待」と「実感」の関数であり、次年度の経営計画における資源配分（予算・時間・人的資源）を決定付ける戦略的な重要性を持っています。

本分析は、R4 年度から R7 年度までの「生データ」を縦断的に検証し、客観的なエビデンスに基づき構成されています。特に、教職員の内部評価と、生徒・保護者が受容する教育サービスの質との間に存在する「認識のズレ（ブラインドスポット）」を特定することに主眼を置いています。このズレを解消し、三者のベクトルを一致させることこそが、R8 年度に向けた組織強化の最短距離となります。

まず学校の「組織的健康状態」を示す三者満足度の全体トレンドを概観し、現状の立ち位置を明確にします。

2. 三者満足度の全体俯瞰と経年的トレンド

芥川高校の全体満足度（生徒 Q1，保護者 Q1，教職員 Q1）を俯瞰すると、教職員の極めて高い自己評価に対し、保護者・生徒側の実感が緩やかに乖離している構造が浮き彫りになります。

満足度推移の評価

教職員の教育活動全般への肯定的回答（Q1：1+2）は、R4 年度時点で 95.1%という高水準にありました。最新の R7 年度生データにおいても、多くの教職員が「1（よくあてはまる）」または「2（ややあてはまる）」を選択し、内部的な手応えは維持されています。一方、保護者（R4 Q1）では肯定的回答が約 85%程度に留まり、生徒（R4 Q1）では「3（あまりあてはまらない）」を選択する層が約 15～20%常在しています。これは、学校側が提供する価値が、生徒・保護者の満足度に 100%転換されていないことを示唆しています。

三者間相関の可視化とギャップ分析

主要指標における肯定的回答の比率に基づき、認識のギャップを可視化します。

評価指標（設問番号）	教職員自己評価（R4-R7）	生徒・保護者の実感（R4）	ギャップ（教職員偏差）
教育満足度全般（Q1）	90%以上（安定継続）	保護者：約 85% / 生徒：約 75%	**+10~20%**：教員の自負が先行
学校の特色（Q3）	71.6%（R4）	生徒授業満足度（Q31）：分散傾向	**中程度**：特色が学びに直結せず
校則遵守実感（Q12/Q9/Q8）	60.6%（R4）/ R7 も分散	生徒自己評価（Q9）：極めて高い	**反転ギャップ**：遵守基準の不一致

「So What?」：経営的リスクと機会

教職員の自己評価が常に高い状態（高止まり）にあることは、組織としての自信の表れである一方、現場の課題感に対する「不感症」を招くリスクを孕んでいます。特に R6 教職員データのや R7 のデータに見られる「全項目最低評価（4）」を投じる極端な否定的層（ディシデント・グループ）の存在は、組織内の摩擦が PDCA サイクルを阻害している予兆です。これらを放置すれば、R8 年度の募集戦略において「特色の形骸化」を露呈し、選ばれる学校としてのブランド力を毀損する恐れがあります。

次は、教育満足度のキーデバイスである ICT 活用の実態を掘り下げます。

3. 重点項目分析（1）：ICT 活用の実態と効果

１人１台端末の導入は形式的な「活用」から、教育効果を創出する「戦略的活用」への転換が求められています。

共通設問（Q4）の深掘り

「1 人 1 台端末の効果的活用」について、R4 教職員の肯定的回答は 86.8%と高い手応えを示しています。しかし、生徒側のデータを見ると、Q4 において「3」や「4」を選択する生徒が散見されます（R4 生徒等）。教職員が「使っている」ことに満足しているのに対し、生徒は「学びの質」を問い直している形です。

認識のズレ：授業デザインの不一致

R4 生徒生データ 3 を見ると、Q4（ICT 活用）に「3」、Q31（授業充実度）に「3」を付けています。この相関は、ICT 活用が単なるデジタル化（置換）に留まり、生徒が期待する「理解の深化」や「学習効率の向上」に寄与していないことを示しています。教職員が高い評価を下す背景には、端末利用頻度の向上を「成果」と誤認する授業デザインの甘さがあると言わざるを得ません。

インパクト評価

R8 年度に向けた投資優先順位は、ハードの追加導入ではなく、ICT を前提とした「アウトカム重視の授業設計」へのシフトです。Q4 と Q31 の分散を抑えることが、学校全体の満足度を底上げするレバレッジポイントとなります。

4. 重点項目分析（2）：校則遵守と指導方針の受容性

校則指導の受容性は、生徒の自律性と教職員の指導負担に直結する、組織文化の根幹課題です。

多角的データの対照（R4 生データより）

- **生徒の自己認識（Q9）：** 圧倒的に「1」が多く、大半の生徒が遵守を自負している。
- **教職員の実感（Q12）：** 肯定的評価（1+2）は 60.6%に留まり、32.8%が「3（守っていない）」と回答。

乖離の「スモーキング・ガン」：指導の納得感

最大の課題は、生徒 Q8（先生の指導は理解できる）の低迷にあります。生データを確認すると、Q8 に「3」や「4」を投じる生徒が続出しており（R4 生徒等）、教職員が Q11（ルールの十分な説明）を「行っている（R4：81.7%）」と確信しているにもかかわらず、その論理が伝達プロセスで消失していることが判明しまし

・全クラスでクラス開きを実施したことで新学期がスムーズに始められ、人間関係の醸成が図られている。

〇令和７年度学校経営計画にもとづく本校の取り組みについて

・国際化が進む中で、オーストラリア語学研修などの多様な人との関わりを通して人権意識を養うことは重要なのではないか。

〇生徒による授業アンケートについて

・１学期期末に実施計画のため、次回以降に結果報告予定。

・アンケート結果を大阪府内の府立学校と比較しての改善点などを分析してみることはできるのだろうか。

・自由記述欄の要望に対する短期的な対応をどのようにしていくのか、また厳しい意見に対する教員のモチベーション低下をどうサポートするのか。

〇進路指導部より（2024 年度入試結果、44 期３年４月進路希望調査結果、2025 年度進路指導計画）

・受験の早期化に伴い、１年生の文理選択講演会を６月に早めるなど、進路指導の早期化を行っていることを報告した。

・志望校選定において安全志向が高まっていることが、受験の早期化につながっているのではないか。

・進路希望調査の結果については、４年制大学への進学希望が８割以上あると報告した。

・オープンキャンパスに保護者とともに行く率が年々増えてきている。保護者と生徒では見方が違うこともあるため、大学選びのサポートになるのではないか。

〇保護者からの意見書について

・提出なし。

〇教科書選定について

・次回の協議会で報告予定。

〇その他

・令和 10 年度に高校入試改革が行われ、アドミッションポリシーによる選抜が始まるため、本校のアドミッションポリシーを今後協議していきたい。

・中学生向けのオープンキャンパスについては、生徒が説明する場を設けると、教員が話すよりもリアリティを感じることができ、広報効果が高いのではないか。また、生徒の自主性にもつながるのでないかとの意見があった。

第２回学校運営協議会（令和７年 11 月 26 日実施）

〇学校の様子について

・オープンスクールで芥川の様子を 410 組 700 名以上の方に見てもらった。（動画にまとめたものを視聴）

⇒感想にて、待機時間が長かった。との声もあった。和太鼓部等の学校の売りが昨今重要なのではないか。

⇒生徒が案内してもらえることがとてもよい。

・オーストラリア語学研修の報告

・文化祭を２日間に渡って実施した

・PTA バレーボール３位

・修学旅行（SNS にて広報）

・ナインフェスタにてダンス部が参加した

・介護体験（車いす体験）にて交流

・ロッカー等のペンキ塗り大会実施予定

・京都外大や JICA、看護等の出前講座実施予定

・芸術鑑賞予定

・入試に向けて（次年度７クラス）

〇令和７年度学校教育自己診断について

・12 月初旬に実施予定。保護者・教職員用の設問は昨年度と変更なし。生徒用の設問もほぼ例年通りだが、25 番～31 番の設問を増やした。

〇令和７年度学校経営計画にもとづく取り組みの進捗状況

・７クラス募集となった。高槻３校が１クラス減になっている状況。学校説明会等で広報にも力を入れている。

・令和 10 年度から始まる特色枠入試について。芥川はコツコツ努力できる生徒に有利になる選抜基準を検討している。

⇒同窓会にもアピールしてみないか。

⇒カリキュラム・ポリシーにおいて、語学力の向上よりも国際交流に力を入れたいため変更があった。

⇒アドミッションポリシー

〇進路状況報告、進路指導の取り組みについて

・大学進学希望者が 75%（過去最高）

・指定校推薦の状況報告

・就職試験の状況（昨年度１名→今年度 11 名）

・大学共通テスト、今年度から個人出願へ。全員無事出願できた。

⇒志望希望書等の業務負担はどんなものか気になった。

⇒保育士のなり手がいない現状がある。芥川のカリキュラムには保育があるため非常にありがたい。

〇令和８年度使用教科書について

⇒学校側が決めた教科書を府教委の方で拒否されることがあるのか。という質問が出た。

〇その他

・小中学校 PTA がなくなってきつつある現状の中、今後 PTA との連携をどうしていくべきなのか。

⇒学校側の思い等をお伝えしたり、交流する場がなくなる分をどのように埋めたら

府立芥川高等学校

た。
「So What?」：組織的悪影響
「守っている」と信じる生徒に対し、「守っていない」と断罪する教員の構図は、生徒の帰属意識を損なうだけでなく、教職員に無益な指導コスト（感情労働）を強いています。特に教職員 R7 生データに見られる極端な否定評価は、こうした不毛な対立による組織疲弊（バーンアウト）のシグナルと言えます。
5. 重点項目分析（3）：進路指導の充実度と情報の非対称性
進路指導は、芥川高校が提供する最大のベネフィットであり、ブランドの「出口補償」です。
指導内容の定性的評価
　教職員は Q17（情報の提供）に対し 91.8%の肯定的回答を寄せており、非常に高い自負を持っています。しかし、生徒 Q10（将来の進路を考える機会）には「2」や「3」の回答が目立ち、教職員が提供する「情報の量」と、生徒が求める「納得できる将来設計の機会」との間に質的な非対称性が存在します。
期待値のミスマッチ分析
保護者 Q9（適切な指導）および Q11（学年に応じた充実度）における「3」の回答は、保護者の「伴走型指導」への強い渇望を示しています。教職員が事務的に情報を流す（Push）だけでは、保護者が期待する「個に応じたキャリア形成支援」というアウトカムには到達できません。
効果検証
生徒 Q10（生き方への思索機会）が高い生徒ほど、Q1（学校満足度）が安定する傾向が強いことは、進路指導が単なる事務ではなく、生徒の「自己肯定感」を醸成する装置であることを意味します。
6. R8 年度学校経営計画に向けた戦略的提言
データの乖離を埋めることは、学校運営を「提供者論理」から「顧客（生徒・保護者）視点」へ再定義することを意味します。
最優先改善項目の選定
1. **校則指導の「納得基準」平準化：** 指導基準の不透明さの解消。
2. **ICT の「アウトカム駆動型」活用：** 授業満足度（Q31）との連動。
3. **進路指導の「対話型」転換：** 情報提供から思索機会へのシフト。

具体的なアクションプラン
- **教職員間の共通認識醸成（内部統制の強化）**
  - R6/R7 で見られた教職員内の否定層を包摂するため、PDCA の形式化を廃し、現場の指導基準を擦り合わせる「ケーススタディ検討会」を定例化。
- **生徒への説明責任強化（納得感の向上）**
  - 生徒 Q8 の改善を狙い、校則指導時には「規則の文言」ではなく「その規則が守るべき生徒の利益」を明示する指導プロトコルを標準化。
- **保護者へのアウトカム可視化（信頼関係の再構築）**
  - 進路情報の「量」だけでなく、各学年で「どのような自己変容を促したか」というプロセスを学校通信等でデータと共に可視化。

指標の設定（KPI）
R8 年度診断において達成すべきターゲット：
- **生徒 Q8（先生の指導の理解）：** 現在の「3」回答者の 50%を「2」へ移行させる。
- **生徒 Q31（授業満足度）：** 「1」および「2」の合計値を 85%以上に引き上げる。
- **教職員 Q12（生徒の校則遵守）：** 否定的回答（3, 4）を 20%以下に圧縮する。

7. 持続可能な学校経営に向けて
　本分析を通じて明らかになった課題は、芥川高校がさらに強固な組織へと進化するための「成長の痛み」に他なりません。現状、三者の基本的満足度は維持されており、課題が可視化されたこと自体が、この組織の自浄能力と健全性を示しています。
　R8 年度に向けた最大の戦略は、自己診断データを単なる評価数値として処理せず、三者間の「対話のプラットフォーム」として機能させることです。教職員内部の認識のズレを解消し、生徒・保護者との間に誠実な説明責任を果たすプロセスを通じて、芥川高校は地域から「真に信頼される教育拠点」へと結実すると確信しています。

よいのだろうか。
⇒フェス等で保護者に向けての授業をして、高校がどのような授業をしているか感じてもらって理解が得られるのではないか。
第３回学校運営協議会（令和８年２月 19 日実施）
〇校長より
　挨拶来年度、学級が１クラス減の予定。高槻市内の生徒数が減っていく現状。よりより意見を頂戴したい。
〇学校の様子について
・新調した校旗(グラウンド掲揚用)を披露。１期生のころのアルバムを確認して、色味を再現した。
・SNS による広報活動報告（部活動の実績報告がメイン）
・12 月以降の行事報告（京都外大からの出前講座、高槻九中との交流、部活動部員有志 100 人が参加したペンキ塗り、高槻の障がい者団体との交流を行ったふれあい冬祭り、芸術鑑賞『ハンナのカバン』、１・２年生球技大会、先輩の話を聞く、卒業式）
〇令和７年度学校経営計画にもとづく取り組みの学校による自己評価
・進路指導に満足・授業への満足度について生徒は良かったが、保護者の満足度が生徒に比べ低かった。学校の取り組みが保護者に伝わる工夫を考えていきたい。
⇒年々授業満足度が高まっている要因としては、体験型授業などが増えてきていることもあるのではないか。
・授業への満足度 70%から 90.6%へとアップしている点が良い
・地域交流の肯定率を次年度はもう少し上げていきたい。
・国際交流（ミラニだけでなく台湾とも）
・教員の協力体制の生徒の肯定率が低かった。
・SNS 上でのトラブルが目立つようになってきているため、SNS などの活用の仕方などについても規範意識、人権教育について指導していきたい。
・JICA の職員の方とも協力・ブログは控えめに⇒SNS への移行が時代にあっているのではないか。
⇒しつこいぐらいに広報として SNS 等へリンクを提示するのがよい。
⇒映っている生徒の偏りに対してご意見をいただくこともあるので、そこは懸念点だが、やはり効果はあると思われる。
〇本校生の進路状況
・４４期生は厳しい結果となった。「上位」の学校が安全志向になり、本校生の受験が多い「中堅」の大学を「滑り止め」として受験しているのではないか。受験早期化に対して良いスタートが切れていないのではないか。
・一般 55 名から 96 名へ。最後まで粘り強い受験ができるよう進路指導してきた結果ではないか。
・近畿大学への合格が増えた理由
⇒学力が２極化してきているのではないか。
・追手門大学、摂南大学が厳しい結果になった一方、チャレンジしている生徒もいる。
〇令和８年度使用教科書採択について
・昨年度との変更はほぼないのではないか。どういうことに重きを置くかが分かりやすい資料があれば嬉しい。
〇令和７年度授業アンケート報告
・７月より 12 月の方が平均が高くなった。先生で集まって授業力を向上するための話し合いなどを行った
⇒他の教科でも見学できる環境は良い。
・Ｑアンケートの項目は決まっている？
　Ａ基本的に決まっている。
　→できれば、教科ごとに項目を変えてみてもよいのではないか。
・教科ごと、先生ごとにアンケート結果を振り返り、次年度へ向けての話し合いの場などがあればよいのではないか。

３　本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R６年度値]	自己評価

府立芥川高等学校

1．自ら考え行動し、自律的・主体的に学びに向かい進路を切り拓く力を持った生徒の育成	**1）学力の向上** ア　確かな学力を身につけ好奇心を掻き立てられる授業を創るための、教職員が学びあえる環境づくり	ア・授業アンケートの振り返りによる授業改善 ・学校全体で相互授業見学を実施し、気づいた長所を見学シート等の利用により必ず伝えあう。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における教科指導への肯定率85%以上を維持［86.1%］	ア・生徒向け学校教育自己診断での教科指導への肯定率　90.6%（○） ・相互授業見学週間を令和７年 11 月４日～20 日まで実施。見学週間での相互見学の報告は０名であったが、10 年経験者研修での公開授業において 15 名の先生方の授業観察があり、研究協議には 12 名の参加で行えた。次年度は、相互に見学しやすい時期や期間を設定したい。
	イ　言語活動の充実と、より効果的な ICT 機器の活用	イ・言語活動に重点を置いた校内研究授業を実施する。 ・ICT の活用に関するアイデアやツールを、クラウドサービス等を用いて共有・ストックし、より多くの教員が効果的に利用できるようにする。	イ・授業アンケートにおける授業満足度（興味・関心・知識・技能に関する生徒意識）85%以上を維持［88.2%］ ・生徒向け学校教育自己診断結果における ICT 活用の肯定率 88%をめざす［86.1%］	イ・ICT 及び AI を活用した授業に関する研修会を実施した。（○）また、考査についても電子返却の実施に向けて校内で研究会が立ち上がり、公務のより一層の効率化についても検討がなされている。次年度にはその取組を実践できるようにしたい。授業アンケートにおける授業満足度は 91.2%（◎） ・生徒向け学校教育自己診断の「ICT 活用」における肯定率 90.9%（○）
	ウ　観点別学習評価の円滑な運用と自学自習力の育成	ウ・観点別評価により指導と評価の一体化をすすめ、生徒が主体的に学習し自らの学びを調整する力を育む。 ・長期休暇や休日の自習室利用の推進、週末課題等、自学自習力をつけさせるための取組みを行う。	ウ・授業アンケートにおける授業の事前事後に必要な学習の実施率 85%以上を維持［85.9%］ ・１・２年生９月の「学力生活実態調査」における休日の自主学習２時間以上の割合 20%をめざす［1 年 12.2%２年 10.6%］	ウ・授業アンケートにおける「授業の事前事後に必要な学習の実施」の肯定率 85.9%（○）観点別評価については、生徒・保護者への説明ができるような準備を心掛けながら取組むことができている。次年度以降も継続していく。 ・９月の「学力生活実態調査」における休日の自主学習時間２時間以上の割合、１年 13.1%、２年 12.8%。生徒の意欲醸成が不足している結果となった。（△） 　次年度以降については、学力生活実態調査を含め模試等の返却においても、生徒一人ひとりの意欲の向上を促すような振り返りを実施する。
	2）希望進路の実現 ア　望ましい勤労観・職業観を持ち、主体的に進路選択できる力を育むキャリア教育の推進	ア・「憧れる存在をみつけよう」をコンセプトに、卒業生や外部人材による進路講話やガイダンスを通して、社会に貢献する自分像をイメージできるようにする。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における進路指導（進路や生き方について考える機会の提供）への満足度 90%以上［94.6%］	ア・学校教育自己診断の「進路指導」への満足度は 94.4%。（○）進路別にも全体にも、卒業生や外部人材による進路講話やガイダンス、探究の時間を活用した大学等の訪問を通して、進路に対する意欲の醸成を行えた。オープンスクールにおいても卒業生を招いてのパネルディスカッションを行うことができ、学校の魅力発信の一部を担うこともできた。
	イ　個々の生徒の想いを受け止め希望進路に応じたきめ細かい進路指導	イ・個別懇談等により、一人ひとりきめ細かい進路指導を実施し、進路実現に向けて頑張り切れるよう支援する。また、活動記録を適切に残し活用する。 ・外部教育産業を活用して、学力生活実態調査の分析結果を各教科・学年団で共有することで、指導の振り返りと計画、面談等に生かす。 ・「進路のてびき」の有効活用や早期のオープンキャンパス等への参加奨励により、早い段階から希望進路実現に向けた意識を高める。 ・保護者向け進路講演会の実施や、学年・学級単位で実施した進路行事に関する保護者への情報提供に努める。	イ・生徒向け学校教育自己診断結果における進路情報提供への満足度 90%以上［93.7%］ ・保護者向け学校教育自己診断結果における進路情報提供への満足度 80%以上［81.4%］ ・希望進路達成率 85%以上［87.0%］	イ・学校教育自己診断の「進路情報提供」への満足度は、生徒評価 93.3%、保護者評価 84.5%。希望進路達成率○%。（○）本年度も、教育産業を活用した「学力生活実態調査」の分析会を学年別に２度実施できた。その分析を生かし、各教科での指導に生かしていた。また、オープンキャンパスへの参加奨励や探究活動での進路先訪問を通して、自己の進路について深く考える機会を得た。次年度以降も継続していきたい。保護者向けの進路講演会の実施も２回実施。保護者への進学への備えについても啓発できた。次年度以降は、模試等の進路データや近年の入試動向を含めて情報提供を、教職員、生徒、保護者へ積極的に手行いたい。

府立芥川高等学校

2．自己肯定感を高め他者を尊重する態度を養い、高い規範意識と人権意識を備えた豊かな人間力を持った生徒の育成	1）体験学習の充実 ア 福祉ボランティア実習の充実	ア・保育実習及びその事前・事後指導を充実させ、福祉に対する意識をより高めるための機会とする。 ・高齢者疑似体験や障がい者との交流等、福祉ボランティアに関する体験学習の機会を持つ。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における福祉ボランティア等に関する肯定率85%以上を維持［90.8%］	ア・学校教育自己診断の「福祉ボランティア等に関する」肯定率は、91.2%（○）今年度も、保育園に２学年全員が保育体験に参加した。また、福祉体験として、地域の社会福祉協議会や介護施設の職員の方に協力いただき、福祉体験も行うことができた。次年度以降も継続を考えているが、持続可能な形での実施時期、方法の検討が必要と考えている。
	イ 地域と連携した体験活動の充実	イ・地域主催の行事等への積極的な参加やボランティア活動、近隣の他校種との交流等を通じて、地域を愛し、地域に愛される体験の機会を持つ。	イ・生徒向け学校教育自己診断結果における地域交流の肯定率84%以上［83.4%］	イ・学校教育自己診断での「地域交流」の肯定率は、86.5%。（○）近隣の敬老行事などに部活動として招待され地域の連携を深める一方で、途絶えていた保育園との交流も部活動を通して復活するなど地域交流を盛んに取組めた。また、生徒・保護者・同窓会・教職員を巻き込んで、地域の企業との連携で、下足室、階段等のペンキ塗りを行った。生徒の自己有用感を涵養するとともに、地域の学習ハブとしての機能を持たせるきっかけとなった。次年度以降も、多様な地域連携（除草等）に取組む。
	2）学校行事、部活動の振興 ア 主体性・協働性の涵養、地域とのつながりによるシティズンシップの涵養	ア・生徒が行事の立案や運営に主体的に関与して協働的に取り組み、やり切る経験ができるよう、サポートを強化する。 ・学校行事を地域や近隣施設との交流の機会とし、連携を深める。	ア・教職員向け学校教育自己診断結果における行事充実への工夫の肯定率90%以上を維持［93.7%］	ア・教職員の学校教育自己診断の「行事充実への工夫」の肯定率は88.6%。（△）文化祭へは、近隣の保育所の園児を招待し、生徒がアテンドを行った。体育祭については、連携はできなかった。次年度以降も連携を継続したい。生徒の行事の立案や運営に関しては、一部生徒にその様子は見られたが、生徒会などを通した全体的な動きになるよう特別活動部が主体となり、次年度以降も支援していく。近隣中学校の生徒会との連携も今年度はあったので、次年度以降も継続できるようにしていきたい。
	イ 部活動の活性化	イ・行事において部活動部員の活躍の場を設け、学校全体で部活動を応援する雰囲気をつくり、入部率および継続率向上を図る。クラブ単位での外部連携を推進する。	イ・６月時点の部活動加入率75%以上を維持［79.6%］	イ・６月末での部活動加入率86%。（◎）始業式・終業式での表彰を通して、学校全体として部活動を応援している雰囲気づくりを行っている。次年度以降も継続したい。
	3）規範意識の醸成 ア自主的にルールやマナーを考え、守る生徒の育成	ア・全ての教職員が「あくたベース（生徒指導編）」に基づいた統一した指導を行う。 ・ルール・マナー・モラルを守ることが、皆が安心して安全に過ごせる場をつくることにつながることを伝えていく。 ・生徒たちがルール・マナーについて意見を表明する機会を創出する。	ア・懲戒件数５件以下［４件］	ア・懲戒件数は２月末現在 12 件。（△）人権意識の醸成も含め、ルール・マナー・モラルを守る指導に学校全体で取組んだ。しかし、次年度以降は、SNS 関連のモラル、リテラシーについては、教科のみならず普段からより一層学校としての取組が必要だと考える。
	イ あらゆる機会をとらえての規範意識向上の働きかけ。挨拶がしっかりとでき、時間を守れる生徒の育成	イ・自らと身の回りの人を大切にするということがすべてにおいて優先するという日常的な指導を徹底し、交通安全指導や防災避難訓練、薬物乱用防止教室等様々な機会も利用して、規範意識の向上を図る。 ・遅刻指導を通して、時間を守り、学校生活を大切にする生徒を育てる。	イ・学校教育自己診断結果における生徒の規範意識の肯定率を、生徒向け 93%以上維持［94.5%］、教員向けを64%［61.7%］とする。	イ・学校教育自己診断における「規範意識」の肯定率は、生徒 96.3%（○）、教員 52.4%。（△）薬物乱用については、学年での講演会が実施されているが、継続的な指導も必要であると考えている。また、４月からの道路交通法の改正に伴った自転車のルールについては、全体での指導を考えている。
	4）人権意識の向上 ア 一人ひとりを大切にし大切にされる人権教育の推進	ア・身近にある人権課題を見逃すことなく、全教員が一貫性のある人権教育を推進する。 ・保健室での聞き取りや教育相談委員会での情報を活用し、スクールカウンセラーや専門機関等と連携して、生徒、教員一人ひとりを大切にするために教育相談をさらに充実させ、生徒の成長を支援する。	ア・生徒向け学校教育自己診断結果における人権教育への肯定率88%以上を維持［91.5%］ ・生徒向け学校教育自己診断結果における気軽に相談ができる教員の存在の肯定率 70%以上を維持［75.3%］	ア・学校教育自己診断での「人権教育」への肯定率93.1%、（○）「気軽に相談できる教員の存在」への肯定率 81.9%。（○）人権課題が生じたときに、教職員に相談できる体制づくりは出来てきている。教職員の連携も少しずつできるようになってきた。次年度以降は、学校全体としての人権意識の向上を目指し、生徒だけでなく教員向けの人権研修を実施する。
	イ 生徒、教職員が共に学び人権意識を高める	イ・人権教育計画に基づき、教科や特別活動等、学校教育活動全般を通じて人権教育を実施し、一人ひとりを大切にする教育を実践する。 ・生徒のみならず、教職員も人権に関する学校内外の研修に積極的に参加し、人権意識の向上を図る。	イ・教職員向け学校教育自己診断結果における人権教育への肯定率90%以上を維持[91.3%]	イ・学校教育自己診断での「人権教育」への教職員の肯定率 88.9%。（○）生徒に実施の人権教育であっても授業の空きがあれば聞きに来る教員が見られた。次年度以降も、生徒の人権教育も生かしながら、学校全体の人権意識の醸成をめざす。

府立芥川高等学校

３．多様性や異文化を理解する態度を備え、豊かな教養とコミュニケーション能力を身につけた、グローバルな視点で考え社会に貢献できる力を持った生徒の育成	**１）使える英語力の育成** ア 高大連携等「グローバル専門コース」の取組みの継続・発展と、実用性の高い英語力育成	ア・グローバル専門コースにおいて、大学等外部機関との連携による特別授業や留学生等との英語での交流など、取組みを継続・発展させる。	ア・授業アンケートにおけるグローバル専門コース選択科目の授業満足度90%以上を維持［92.8%］	ア・授業アンケートにおけるグローバル専門コース選択科目の授業満足度○%。（評価）大学等の連携も今年度も継続して実施できた。次年度以降は、この成果をコース以外の生徒へ広げていく方法を模索する。
	イ 使える英語力の向上と、英語検定等の資格取得推進	イ・校外の英語力向上プログラムや人材の活用、授業等を通じて英語４技能を育成する。検定試験２次対策のサポートを行い、資格取得をめざす生徒を増やす。 ・グローバル専門コースの現在の取組みを、コース以外の生徒にも広げていく。	イ・３年生４月の「学力生活実態調査」において英語の到達度Ｂゾーン以上の割合 34%［31.0%］	イ・３年生４月の「学校生活実態調査」の英語到達度Ｂゾーン以上の割合 32%。（評価）検定試験の２次対策のサポートは実施できた。実際Ｂゾーンの生徒がそれだけいたが、進路実現にはつながらなかった。次年度以降は、生徒の意欲を高め進路実現に向けた英語力の育成をするため、検定試験、模試や学力生活実態調査を有効に活用し、家庭学習や授業の取組の意欲を涵養したい。
	２）国際感覚の育成 ア 海外交流生の派遣や受け入れ等、国際交流の促進	ア・海外交流校への短期語学研修派遣を実施する。並行して手紙やオンライン等での国際交流体験を促進する。	ア・国際交流プログラムに参加した生徒の満足度 95%以上を維持［96.4%］	ア・国際交流プログラムに参加した生徒の満足度 98%。（○）本年度は、姉妹校を締結し、オーストラリア・クイーンズランド州ミラニ高校へ交流に○名の生徒が参加した。隔年での渡航であるため、台湾の百齢高中との姉妹校提携を本年年度中に締結し、次年度は台湾での理系向け海外研修を実施予定。
	イ 国内で実施可能な異文化理解の機会の創出	イ・異文化理解をテーマとする国内修学旅行、留学生やJICA 海外協力隊経験者による講演など、国内において実施可能な異文化理解を目標とした学習を実施し、日本に住む高校生としての国際感覚に根差したアイデンティティを育む。	イ・生徒向け学校教育自己診断結果における異文化理解の取組みへの満足度 85%以上を維持する［90.8%］	イ・学校教育自己診断の「異文化理解への取り組み」生徒満足度 91.2%。（○）異文化理解をテーマにした修学旅行での民泊は、生徒に非常に良い経験となった。また、JICA 海外協力隊経験者による講演も生徒に肯定的にとらえられ、多様性の理解につながった。次年度以降も継続する予定。
４．信頼される学校づくり（教員力と情報発信力の向上）	**1）次世代を支える教員の育成とチームとしての教員力の向上**	・種々の取組みの充実と並行して、業務の軽減・円滑化・合理化・平準化・効率化を図り、教職員が連携協力し支え合う余裕を生むことで組織力の向上を図る。 ・「何かありますか」から「これやりますね」への移行を図り、お互いが声をかけ合い、助け合い、学び合う組織文化を醸成する。 ・次世代を支える教員が中心となって企画運営する、思いや疑問、悩み、課題がフランクに話せる教員の自主研修などによって教員力向上を図る。	・生徒向け学校教育自己診断結果における、教員の協力体制に関する肯定率87%以上を維持［91.9%］ ・教員向け学校教育自己診断結果における、教育活動における問題意識や悩みが相談しやすい人間関係に関する肯定率 90%以上を維持［93.6%］	・学校教育自己診断での「教員の協力体制」に関する生徒の肯定率 94.7%。（○）学校教育自己診断での「教育活動における課題意識や悩みを相談しやすい人間関係」の教員肯定率 77.3%。（△）業務の軽減・標準化については、まだ課題が残るがそれぞれの学年における共助については少しずつ改善の傾向がみられる。また、校内の自主研修組織における学校での課題の共有やスキルアップ、悩みの解消もできつつある。次年度以降も自主研修の積極的参加促しを取組んでいく。
	2）教職員の働き方改革による時間外勤務削減	・ICT の活用、部活動時間の適切な設定と部活動指導員の活用、業務のスクラップによる軽減等、働き方改革を推進し時間外勤務削減を図ることにより、教職員の健康とワークライフバランスを守り、教材研究や生徒と向き合う時間、自主研修時間の確保に努める。	・月 80 時間を超える時間外勤務教職員の延べ人数を引き続き減少させる［２月末まで延べ34人］	・２月末までの在校等時間が 80 時間を超える職員数は○人。（評価）管理職を含め、放課後での仕事や部活での活動時間について意識をして取組めている。
		・学校部活動方針（休養日等）の遵守及び全校一斉退庁日の遵守を推進し、時間外勤務の一層の圧縮を図る。	・教職員一人当たりの月間平均超過勤務時間を 30 時間未満とする。［１月末まで31.7 時間］	・時間外在校等時間が１月末までの平均は○時間。（評価）一斉退庁日やノークラブデイの取組を次年度も継続。
	3）開かれた学校づくりと広報のための、学校情報と魅力の積極的な発信	・ホームページや学校新聞「芥川」、メールマガジン等のツールや、行事や学校説明会等の学校を公開する機会を有効に活用し、学校の情報や魅力をタイムリーかつ効果的に発信する。 ・SNS を活用し、日常の学校の様子や部活動の取組みを生徒の視点と言葉で発信していく。	・保護者向け学校教育自己診断結果における家庭への情報提供に関する肯定率85%［83.3%］	・学校教育自己診断の「家庭での情報提供」に関する保護者の肯定率 84.5%。（○）学校新聞や SNS の活用により十分な提供がなされている。ので、今後も継続していきたい。
		・「芥川高校の生徒・教職員の魅力」が詰まった学校長ブログを積極的に発信していく。	・オープンスクールおよび学校説明会への参加者950 人以上。［908 人］	・本年度のオープンスクールおよび学校説明会への参加者 718 人。（○）学校に足を運んでもらう、オープンスクールのみに着目すると、生徒の協力のもと模擬授業を含め形式を改めたところ、昨年度のオープンスクール参加者 317 名と比較し本年度のオープンスクールへの参加者 628 人と倍増した。
			・年間 90 本以上［91 本］	・校長ブログ年間３本。（△） 校長のブログとしては、広報活動ができていな

府立芥川高等学校

				い。次年度には、頻度があげられるようにする。しかし、ホームページ以外でのＳＮＳを利用した広報活動は、中学生だけでなく、在校生の保護者にも高く評価されている。また、今年度から広報の中心として、芥川高校「あくたぬき」を活用した広報活動を積極的に行っており、在校生、中学生にも認知度が上がり、親しみやすい学校となっている。